

小学校社会科の学習問題を効果的なものにする教材開発

19058 小澤 洸斗

キーワード：問題解決的な学習 学習問題 教材開発

I 研究の概要

新学習指導要領社会科の目標において、問題解決的な学習が重要視されている。問題解決的な学習とは、「学習者が自らの問題意識に即して学習問題を捉え、それに主体的に取り組み、科学的思考を働かせてその解決の方途を探求するように自発的諸活動を組織する学習指導」とされている。学習問題は授業のねらいを体現化したものであり、それを児童自身の切実な問題として捉えさせることができれば児童が主体的に授業に参加し深い学びになっていくと考える。学習問題に対して児童が問題意識をもち授業のねらいを達成するためには、どのような教材を提示していくかが重要である。本稿では、学習問題と絡めてこれまでの授業実践で作成した教材とそれに対する分析を提案する。

II 研究の結果

1 文献研究や授業実践から考えた学習問題のとりえ

(1) 学習問題成立とは

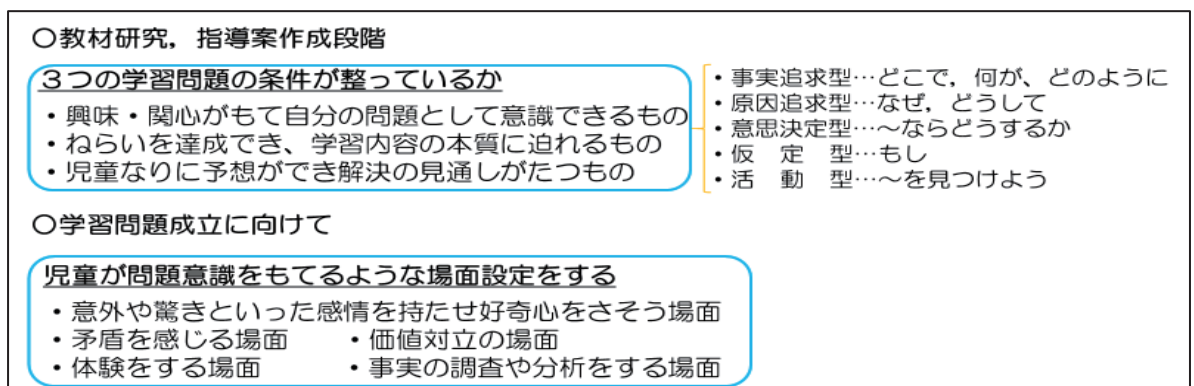
前提として学習問題が成立するとは、教師が児童に学習問題を提示する場面や児童と共に作り上げる場面など、問題解決のために児童の問題意識が共有された時とする。45分の授業の中で導入・調べ活動・まとめなど様々な段階があり、児童の思考は深まり新たな問題意識がうまれてくる。この各時間の積み重ねにより単元を通して社会的事象に対しての思考レベルは高まっている。つまり学習問題は成立したら終わりではなく、児童の考えの深まりとともに学習問題も変化していくものと捉える。

(2) 先行研究に基づく学習問題のとりえ

北(2004)や古川(1982)などの先行研究者の著書を参考に、各主張の共通点やこれまでの経験を踏まえ学習問題について整理した(図1)。

まず、学習問題には3つの条件を満たす必要がある。これは授業前の準備段階で考える際の前提条件として押さえると同時に、授業実践後に学習問題が適切であったか考察する視点の一つとする。その学習問題を5種類に分類した。これらは単元構成に沿って、ねらい達成のために有効な型を使い分けていく。そして、学習問題を児童自身の問題として捉えられる図1のような場面を教材や発問の工夫をして設けていくことで、児童が問題意識をもった状態で、その後の授業展開ができる。

主に本稿では図1にある場面に導くため、またその後の活動が学習効果の高いものにするための教材開発について提案していく。



【図1 学習問題のとりえ】

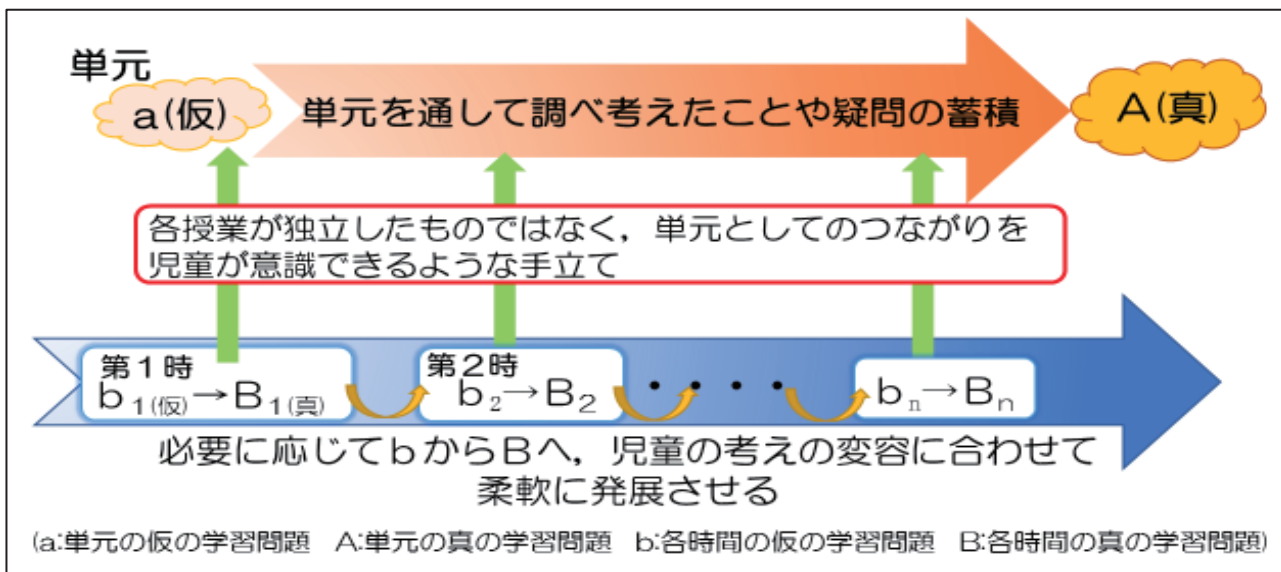
(3) 仮の学習問題と真の学習問題

藤井(1996)は、「質の高い問いが生まれるためには、ある程度その対象について知らなければならない。「調べて考え、考えて調べる」ことを繰り返すうちに、しだいに本質に迫るような問いが生まれてくる。」とした上で、「単元の導入段階において教師が設定した「学習問題」は、後に子供から出された「問い」に基づく「学習問題」が成立するまでの間に、またその成立に導くための『仮の学習問題』『調べていく過程で生じた疑問やひっかかりから発展してできた学習問題を『真の学習問題』の2種類の学習問題があると定義している。

仮の学習問題から真の学習問題への発展は、単元レベルと各時間レベルの両方で起こると考え、図2のように整理した。

単元の導入段階で単元全体を通して考えて欲しいことに目を向け問題意識をもたせ「単元の仮の学習問題(以下:a)」を成立させる。これは、限定的な内容ではなく単元全体を包括し、かつねらいを達成できるものである必要があり、教師側の意図が占める割合は比較的大きい。その後、単元を通して調べたり考えたりしたことや、疑問の蓄積によって高いレベルの深い問いに発展し「単元の真の学習問題(以下:A)」が成立して、それを追究させていく。

「a から A」への発展のためには、各時間の学習問題成立過程において一人一人が問題意識をもった状態で調べ活動等を進めていくことが重要である。そこで「各時間の仮の学習問題(以下:b)」を成立させる際に、図1にあるような場面設定を意識的に行っていく必要がある。また、各時間が独立したものではなく単元としてのつながりを見えさせるように単元構成を工夫したり、適宜「a」を再提示したりしていく。「b」は導入部での浅い次元で固定化する形式的なものではなく、必要に応じて児童の考えの変容に合わせて「b」から「各時間の真の学習問題(以下:B)」へと柔軟に発展させていくことで、児童の問題意識に即したより深い次元での探求がなされていく。



【図2 学習問題の関係図】

2 授業実践-教材開発の提案及び分析-

(1)「天皇中心の国づくり」(第6学年 F 小学校)

基礎実践研究Ⅰで「天皇中心の国づくり」の単元7時間実践授業をした。以下に単元計画及び本稿で取り上げる第5時の指導案を示す。

●単元計画

時間	主な学習活動	指導上の留意点
1	・聖徳太子が、どのような国づくりをしたかったのか調べ、その目的について考える。	・聖徳太子のお札の写真を提示して人物に興味をもたせる。 ・行った事実を記述させるだけでなく、なぜ行ったのかという目的を考えさせることで理解を深めさせる。
2	・遣隋使について調べる。 ・聖徳太子死後の、世の中がどのように変化していくかを予想し、単元を貫く学習問題を設定する。	・教科書 p28 の下部にある航路図に注目させ、距離にして千km以上あることから命がけであったことを捉えさせる。 ・冠位十二階や十七条の憲法を定めたことなどの前時までの既習事項や、聖徳太子死後の年表を基にして、どのような世の中になっていったかを予想させる。
3	・大化の改新や、租など当時の税について調べる。	・大化の改新について、教科書や資料集を使って調べさせ、動画で確認させていく。その際、天皇中心の国づくりが再び進められたことを捉えさせる。 ・貧窮問答歌の資料を読み取って、税の負担がとても大きかったことを捉えさせる。
4	・聖武天皇の時代の様子や、行ったことについて調べる。また、その目的を考える。	・貧窮問答歌と、都のにぎわう様子を比較し、多くの人が苦しい生活を送っていたことを捉えさせる。 ・内容を整理した後、なぜ聖武天皇は国分寺や大仏を造ろうとしたかを問い、仏教の力で世の中を治めようとしたことを意識させる。
5	・聖武天皇は、どのようにして大仏づくりを行ったのかについて調べる。 ・大仏づくりは、人々にとってどんな影響があったのか考える。	・大仏の大きさを提示資料等で実感させ、大仏の造られ方に興味をもてるようにする。 ・聖武天皇にとっての大仏づくりへの思いだけでなく、多くの人々にとっては結果としてよかったのか、よくなかったのかを考えさせることで、多角的な視点から歴史的事象を捉えさせる。
6	・遣唐使を送った目的、鑑真について調べる。	・遣唐使の大変さが分かる資料を提示して、どうしてそこまでして唐に使いを送ったのか関心をもたせる。 ・資料集を活用して唐が多くの国と交流があることを捉えさせ、聖武天皇が遣唐使を送った目的の理解を深められるようにする。
7	・本単元に出てくる人物の中から、天皇中心の国づくりをすすめるために最も活躍したと思う人物(MVP)を選ぶ。	・個人やグループ、全体で誰がMVPにふさわしいか考えさせることで、本単元の歴史の流れを天皇中心の国づくりという観点から見直せるようにする。

●第5時指導案

段階	学習活動（○：発問）	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1 前時の振り返りをする。 ○聖武天皇は、なぜ大仏を造ろうとしたのですか。 2 大仏の大きさを実感する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 聖武天皇は、どのようにして大仏づくりを行ったのだろう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・仏教の力で、平和にするため。 ・小学校よりも大きい。 ・自分の手の何倍あるのかな。 ・どうやって造ったのだろう 	1 前時で学習したことを振り返り、仏教の力で社会の不安をしずめて国づくりをすすめるために、大仏を造ろうとしたことをおさえさせる。 2 校舎の大きさと大仏の座高をプレゼンソフトを使って比較したり、等身大の手のひらの大きさを提示したりして大仏の大きさを実感させることで、造り方に興味をもたせ学習問題を設定する。
展開	3 学習問題に対して予想する。 4 学習問題について調べる。 5 大仏づくりの目的を、人々の目線から考える。 ○なぜ、多くの人々は大仏づくりに協力したのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・大人数で作業している。 ・熱する。 ・東大寺って聞いたことある。 ・農民が作業したんだ。 ・行基がいたから多くの人は協力したのか。 ・少しでも世の中が良くなってほしいから。 ・天皇に逆らえない。 	3 教科書 p34, 35 の絵の1を見て、多くの人が協力していることや、一つ一つの作業が大変そうであることを予想させる。 4 調べる観点を提示し、教科書や資料集を使って調べさせ、多くの農民が協力し、長い年月をかけて造ったことを理解させる。 5 なぜ貧しい生活を送っている人々が大仏づくりに協力したのかを考えさせることで、人々が仏教の力で世の中が良くなって欲しいという思いがあることや、「聖武天皇の詔」の資料から天皇の力が大きく従わざるを得なかった背景があることを理解させる。
終末	6 本時の内容をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・大仏づくりは、仏教の力で世の中の不安を解消しようとし、多くの人々が協力して造られた。 	6 聖武天皇の、仏教の力で国を治めようとする目的のもと、多くの人々の協力によって大仏が造られたことを、各自でまとめさせる。

●考察

学習問題を成立させるまでの導入段階で2つ教材を使った。1つ目は児童が通っている校舎に実物大の大仏を並べた画像である(図3)。校舎と大仏の高さを考慮してなるべく正確なものになるように心がけた。2つ目は等身大の大仏の手のひらを模造紙に書いたものである(図4)。

これらの教材により、「人が寝られるくらい大きい」などのつぶやきが見られ、視覚的に大仏の大きさを実感させることができた。しかし授業記録(図5)から、学習問題を成立させるまでに2名の児童を指名しているが、発問の内容が抽象的で児童の発言は、大仏の大きさの感想にとどまっており、全体として大仏づくりの目的や方法について問題意識がいないため学習問題成立へのつながりが半ば強引になってしまった。

教材開発をするうえで教材単独ではなく、授業のねらいに児童の思考を到達させるためにはどこの場面で教材

提示をして、その後どんな発問をしていくかなどの面からも検証していく必要がある。

また、この授業実践を経て図2で示した単元の学習問題についても研究の視点に加えることになった。



【図3 校舎と大仏の比較】

出典 奈良市観光協会公式ホームページ
<https://narashikanko.or.jp/feature/daibutsu/>



【図4 大仏の手のひら提示場面】

T：これ実は、あの大仏の手の大きさと同じ大きさです。
どうですか？

C：でかい。

C：人が寝られそう。

T：そう、それくらい大きいよね。

(大仏の各部位の大きさの表を提示)

この手の大きさは、3m13cm、中指までが。
なんで、どうやってこんなにでかい大仏を造ったのかな
ということについて勉強していきます。

(学習問題)

聖武天皇は、どのようにして大仏づくりを行ったのだろう。

～大仏の大きさ～



座高	15m80cm
顔の長さ	4m73cm
手のひらの大きさ	3m13cm
足の裏の長さ	3m55cm

【図5 授業記録】

(2)「店ではたらく人」(第3学年 F小学校)

応用実践研究Ⅲで「店ではたらく人」の単元10時間実践授業をした。以下に単元計画を示す。

●単元計画

時間	主な学習活動	指導上の留意点
1	・買い物に関する生活経験を想起し、どこで何を買い物したかを紹介し合う。	・個人でノートに記述した後グループで紹介し合う際に、同じ意見の人がいたらノートに赤で印をつけさせ、全体共有の際に個人の意見に偏りが出過ぎないようにする。
2	・買い物調査アンケートの集計をグループで行う。 ・単元の仮の学習問題成立。 なぜ多くの人がスーパーマーケットで買い物をするのだろうか。	・集計結果からどんなことが分かるか考え、スーパーマーケットが最もよく利用されていることに着目させていくことで、なぜスーパーマーケットが最もよく利用されているか問題意識をもてるようにする。
3	・学習問題について予想する。	・教科書 p73-74 の見開きイラストを参考にしながら予想させていく。
4 5	・映像を使った擬似見学を通して、店の工夫やはたらく人について気づいたことをメモする。	・各児童にタブレット端末を渡して、使い方を簡単に説明した後、映像を見て擬似見学をさせる。
6	・はたらく人について着目し、店の工夫に隠された思いを考える。	・お店ではたらく人の姿の映像を提示したり、インタビュー映像を提示したりしてお店の人がどのような思いではたらくしているのかを捉えさせる。
7	・チラシと白地図を使って、品物がどこから運ばれてくるか調べる。 ・なぜ、様々な地域や外国から品物を運んできているのか考える。	・なぜスーパーは様々な地域や外国から品物を運んできているのか考えた後、インタビュー映像を見せる。
8	・品物を売ること以外の取り組みをなぜ行っているのか考え記述する。	・ワークシートを使って考えた後に、お店の人のインタビュー映像を見て読み取らせることで、よりお店の人の思いを理解できるようにする。
9	・客の願いと店の工夫との関連を考える。	・客のねがいと店の工夫の関係がつかみやすいように並列して板書して、視覚的にとらえやすくする。
10	・単元の真の学習問題成立 コンビニにはない、スーパーのいいところを考えよう。 ・コンビニにはない、スーパーマーケットの強みを考える。 ・単元全体の学びを振り返り、まとめをノートに記述する。	・コンビニやインターネットで買い物をする場面を投げかけて、店の業態ごとに独自の良さがあり、多様な客のニーズに応えるために様々な店の形があることをおさえていく。 ・単元の学習問題を再提示して、本単元の学びを通して分かったことや考えたことについてまとめを記述させる。

め、インタビュー映像を使わない時間であっても児童から「今日は店長さんのインタビューないの？」と聞かれる場面もあった。社会科は「人」に焦点を当てることが多いため、文章だけでなく可能であればその人が話している映像教材があると児童が「人」に目を向けて考えやすくなる。提示の工夫点として、時折小学3年生には難解な言葉も出てくることがや全体で教室のモニターに映すため聞き取りにくいことも考慮して、表現を小学生向けに意識した字幕をつけたことに加えて、映像を流したあと、すべての字幕が一覧で見られるようにスライドを表示した（図9）

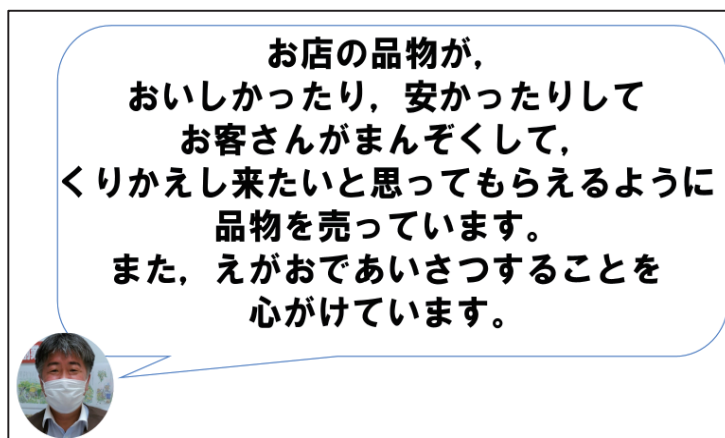
当初は社会科見学の代替としての位置付けであったが、今回の映像教材は学習問題の追究を深めることにおいて非常に学習効果が高いものであった。



【図7 9つの擬似見学用映像，映像の一部】



【図8 店長さんのインタビュー映像の一部】



【図9 店長さんの発言スライドの一部】

③第7時

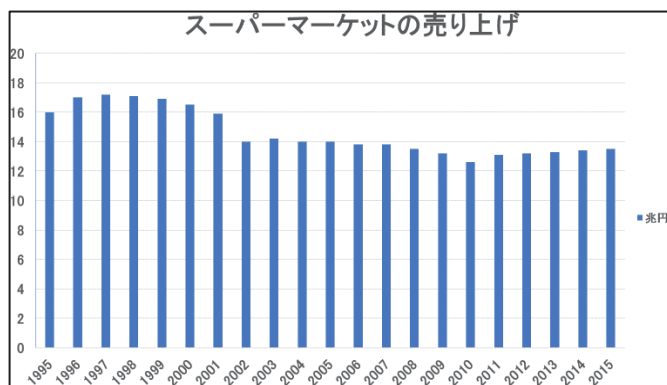
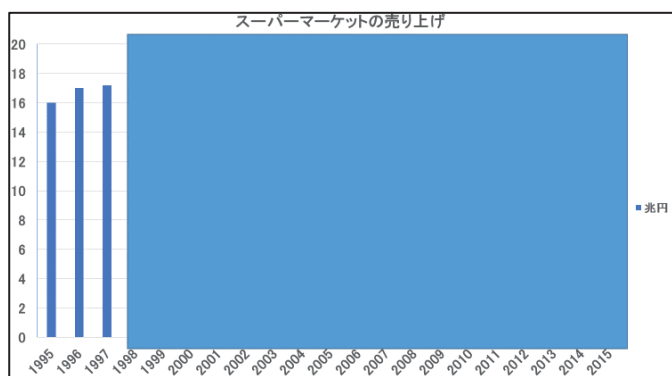
スーパーの品物が様々な地域や国から運ばれてきていることを理解できるように、チラシ(著作権上公表は控える)にある産地を白地図に塗る活動を行った。

別の学校で実践した際もチラシを使用したのだが、実際のチラシをそのまま配布したため情報量が多く難解な漢字も含まれており、読み取りに時間がかかりかかってしまった。そこで、情報量を減らし余白に漢字のふりがなをつけたものを作成して配付したことにより、活動後にじっくりと考える時間をとることができた。一方、情報量を減らしたことで白地図に塗る産地の数が減ったため、完成した白地図から様々な地域から宮城県に運ばれてきていることが、そのままのチラシを使用した時と比べて実感しにくかったという課題がある。

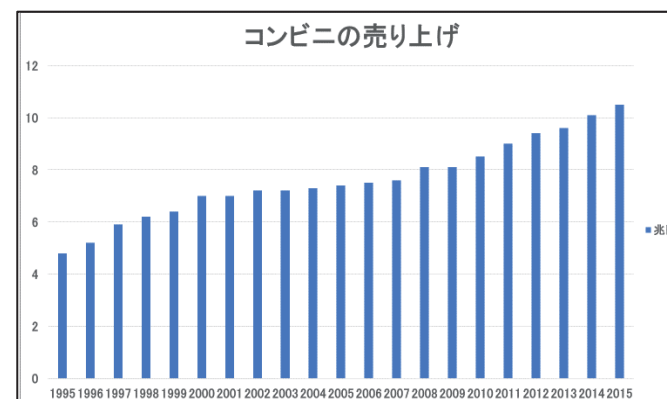
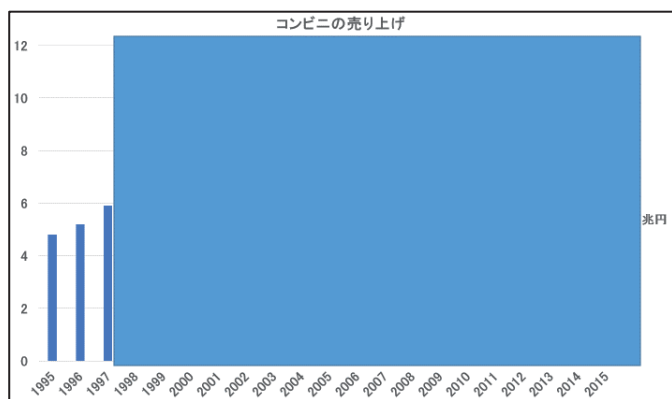
④第10時

授業の冒頭にスーパーの売り上げ推移の一部を隠したもの(図10左)を提示し、この後売り上げがどうなっていくか発問した。単元を通してスーパーの工夫や取り組みを学習してきた児童は、さらに売り上げが伸びているはずだと発言していた。その後、推移の全容(図10右)を見せると、スーパーの売り上げが下がっていることに驚き「何で?」とつぶやく児童が多く見られた。同様にコンビニエンスストア(以下:コンビニ)の売り上げ推移(図11)を提示すると、スーパーとは対照的に売り上げが年々伸びていることにも驚きを示していた。次に、コンビニのメリットを挙げさせた後、コンビニと比べるとスーパーは全くいいところがないのかとゆさぶりをかけて「コンビニにはない、スーパーのいいところを考えよう。」という学習問題を立てた。

売り上げ推移のグラフは細かな読み取りをしなくても視覚的に上がっているのか下がっているのかが判断しやすくテンポよく教師として目を向けて欲しいところに視点をもっていくことができた。また、はじめから完全な表を提示するのではなく、今回のような提示の工夫を行うことで資料に対する児童の興味関心が高まり、より問題意識をもちやすくなったと考える。



【図10 スーパーの売り上げ推移】



【図11 コンビニの売り上げ推移】

3 終わりに

社会科の授業づくりにおいて、提示資料の選定や提示方法を工夫して児童が問題意識をもてる場面設定をすることは、社会的事象に対して問題意識を感じ学習問題を自分事としてとらえやすくするために重要なことである。やみくもに資料を提示するのではなく、児童に何に気づかせたいのかなどの目的を明確にして、発問も吟味していくことで学習問題成立過程において児童の問題意識が焦点化していく。

今後は、導入部だけでなく展開部や終末部において学習問題の追究を深めるための教材開発について考えていきたい。

4 参考文献

北俊夫(2004)『社会科学習問題づくりのアイデア』明治図書

藤井千春(1996)『問題解決学習のストラテジー』明治図書

古川清行(1982)「よい学習問題のつくり方・追及のさせ方」『教育科学社会科教育』(No. 229), 23-25